

原三溪と細川護立の美術蒐集について —宝慶寺石仏群の所蔵をめぐって—

三上美和

【目次】

はじめに

一、宝慶寺石仏群と早崎梗吉

二、原三溪旧蔵宝慶寺石仏

三、細川護立旧蔵宝慶寺石仏群

四、宝慶寺石仏群をめぐる人々—正木直彦、関野貞、荻野伸三郎

五、『世界美術全集』における宝慶寺仏像の紹介

おわりに

はじめに

原富太郎（号・三溪 一八六八—一九三九）は、横浜で生糸貿易を扱った大実業家である。三溪が自宅の横浜本牧の庭園の一部を明治末期に一般公開した三溪園は、重要文化財を含む歴史的建造物が多数移築されており、自然の景観を生かした名園として今日も横浜市民をはじめ多くの人々に愛されている。美術史においては古美術の大蒐集家、同時代の美術家を支援した芸術のパトロンとして重要な役割を果たした。

細川護立（一八八三—一九七〇）は、旧熊本藩主細川家第十六代当主であった。戦前は華族として貴族院議員を務め、昭和四年（一九二九）には国宝保存会会長、聖徳太子奉賛会会長等を歴任し、戦後も文化財保護委員会委員を務めるなど、文化財保護にも深く携わった人物である。護立は東洋美術コレクターの先駆けとして知られ、また三溪同様、同時代の美術家に対しても理解を示し、近代美術の優品も蒐集した。それらは代々細川家に伝わる古美術の名品と共に、護立により設立された永青文庫で公開されている。

筆者はこれまで三溪の美術蒐集と美術家への支援について検討してきた^①。さらに近年、三溪と交流のあった護立の美術蒐集についても関心を抱き、調べ

を進めている。その一環として、三溪と護立の美術蒐集について近代工芸に焦点を当てて論じた^②。その際、三溪が近代工芸にほとんど関心を示さなかった一方、護立は積極的に工芸作家と交流していたことから、個人作家による芸術分野として新たに登場した近代工芸の理解に、世代間の違いがあったことを指摘した。

また、両者の美術蒐集における根本的な相違として、彼らの出自の違いに起因する正反對の様相を指摘した。つまり、三溪は財界における新興勢力の一人であり、新たな文化の担い手として伝統的な価値観をあえて踏襲しようとしたが、護立はすでに華族として特権的な地位にあり、むしろ過去の価値観から逸脱しようとしていたのである。

本稿でも三溪と護立の美術蒐集を取り上げるが、ここでは特に、両者が共に旧蔵していた宝慶寺石仏群を手掛かりに、それらがどのように蒐集されたのかをみていく。

今回取り上げる宝慶寺石仏群は中国唐時代の貴重な遺品とされ、重要文化財に指定されている。

後述するが、現在、国内で所蔵されている宝慶寺石仏群全二十一点のうち、護立旧蔵品十九点は東京国立博物館、奈良国立博物館で所蔵、公開されている。この十九点は昭和三年と同六年に護立により購入されており、その旧蔵品を代表するものである。

そして国内にある宝慶寺石仏群二十一点のうち、護立旧蔵品以外の二点は、明治四十一年に三溪により購入されていた。つまり、国内の宝慶寺石仏はいずれも三溪と護立により購入されていたのである。しかも後述するように、今回取り上げる宝慶寺石仏群の購入に当たっては、同じ人物が関わっているなど、両者は不思議なほど似たような経緯を辿っていたことが分かった。というのも、護立と三溪はいずれも石仏を日本に最初にもたらした早崎梗吉から石仏を入手しており、その際、正木直彦が深く関与していたのである。護立旧蔵美術品については入手経緯が不明なものも多くあることから貴重なことと言える。

石仏群が護立旧蔵であったことは周知のことであったが、三溪旧蔵品のなかで同作品の存在はほとんど知られておらず、また三溪もそれほど石仏を重要視していなかった様子がうかがわれる。その理由は定かではないが、護立入手の

時代ほどには作品の研究も進んでおらず、石仏の重要性が知られていなかったことも理由の一つと思われる。一方、後述するように、護立が石仏を入手した直後、同作品は美術全集の先駆けであった平凡社の『世界美術全集』にも掲載され、その存在はいっそう広く周知されていたのである。

なお、三溪は通常、骨董商から古美術を購入していることから⁽³⁾、同石仏の購入は三溪の蒐集では例外的なものであったことも特筆される。一方護立は、その後もしばしば美術史や歴史の専門教育を受けた学者のアドバイスを受けて購入している。三溪と護立の蒐集における両者の違いは大前提となるものであるが、護立の東洋美術蒐集には、同時代に活躍していた研究者の協力が不可欠であった。このことは護立の美術蒐集の特質であり、三溪の蒐集方法との重要な相違点でもある。

護立と同仏像群については、浅湫毅氏による論考がある⁽⁴⁾。浅湫氏は護立が周囲の助言もあったにせよ、わずか一か月あまりの間に石仏群の購入を決断したことから、護立の審美眼の確かさを指摘している。本稿では護立の購入決断を後押しした専門家たちに注目し、正木直彦、関野貞、荻野伸三郎を取り上げる。

以上の観点から、本稿では、宝慶寺石仏が近代以降日本にもたらされ、今日に至るまでの間に、三溪と護立が所蔵者として重要な役割を果たしていたことを確認する。

まず石仏群の現状について述べた後、三溪の所蔵経緯について述べ、続いて護立の所蔵経緯にも触れる。既に護立の同石仏群の所蔵経緯については先行研究で明らかにされているが、資料を再検討したところより詳しくたどることができたため、ここで併せて紹介したい。

美術作品が展示される際、一般の鑑賞者に作品の来歴が知られることはあまりない。しかし茶道具の来歴ではむしろ特筆される情報であり、貴重な作品を今日まで伝えた人々について知ることも重要なことである。本小論がその一助となれば幸いである。

一、宝慶寺石仏群と早崎梗吉

宝慶寺石仏群とは、中国唐時代、長安（今の西安）にあった光宅寺七宝台の壁面に彫刻された一群の浮彫龕像である（図1、図2）。当初何点造られ、また

どのように設置されていたか正確にはわかっていないものの、残された史料からおよそ三十点余りと推測され、今日三十二点の存在が確認されている⁽⁵⁾。石仏群は当初、光宅寺七宝台の壁面を荘厳しており、後に宝慶寺に移され、その一部は今も同寺に残されている。光宅寺七宝台および石仏群は、則天武后の政権を擁護するために造られたことが指摘されている⁽⁶⁾。

これらの石仏群は、両側に脇侍の立つ三尊仏像と、十一面観音立像（図1）の二種があり、三尊像は触地印を結ぶ如来（図2）、施無畏印を結ぶ阿弥陀と弥勒の三つにほぼ大別されている。特に十一面観音のふっくらとした顔立ち、均整の取れたすらりとした体軀は大変美しい⁽⁷⁾。

現存する石仏群は現在、中国に七点、アメリカに四点、日本に二十一点の三十二点確認されており⁽⁸⁾、東京、奈良、九州の国立博物館と根津美術館、アメリカのフリーアギャラリー、ボストン美術館に収蔵されている。

護立旧蔵品十九点は全て東博に寄託されたと言われていたため⁽⁹⁾、各所蔵館に確認したところ、国立の三博物館所蔵作品は全て護立旧蔵品であった。文化庁経由の作品はそれ以前の所蔵者を特定できなかったが、東博所蔵の十六点、九博二点、京博一点を合わせると十九点になる。したがって、国立博物館所蔵の石仏は全て護立旧蔵と考えると間違いないと思われる。

宝慶寺石仏群のうち、後述する三溪所蔵の二点の石仏は昭和八年、「彫刻乃部」として重要美術品に認定されている⁽¹⁰⁾。その後、昭和十一年（一九三六）、三溪旧蔵二点と護立旧蔵の十九点はそろって国宝に指定されていた⁽¹¹⁾。そして昭和二十五年、前年の法隆寺金堂壁画焼失を契機として制定された文化財保護法により、全て重要文化財に認定された⁽¹²⁾。

宝慶寺石仏群を日本に請来した早崎梗吉（一八七四―一九五六）は、明治末期に日本とアメリカに中国美術をもたらした人物である。岡倉天心の知遇を得て上京し、岡倉家で雑用をしながら、東京美術学校で日本画を学んだ。早崎は天心の依頼で写真技術を習得し、天心と共に中国を訪れ、中国各地の仏教遺跡を撮影し、日本における中国美術研究の端緒を開いた⁽¹³⁾。宝慶寺石仏群を早崎が日本にもたらした時期については、岡倉天心の書簡により、明治三十九年であることがわかっている⁽¹⁴⁾。

早崎は明治三十六年から同三十九年にかけて、陝西省三原宏道大学堂などに教員として招かれ、その間東京帝室博物館嘱託として中国美術の調査に携わっ



図2 如来三尊像 高 110.6 センチ
奈良国立博物館寄託 重要文化財



図1 十一面観音立像龕 総高 107 センチ
根津美術館蔵 重要文化財

た。天心の書簡には、早崎が宝慶寺石仏群を含む中国美術を日本に持ち帰ったことが刺激となり、東京帝室博物館、東京帝国大学が早崎の情報を基に、同年専門家を派遣することになったことが記されている。早崎のもたらした情報、専門家たちの実地調査の端緒となったのである。

なお、早崎の帰国後、明治四十年、同四十一年に、同石仏の何点かが東京帝室博物館に展示され、そのうちの一点は、現在東博に所蔵されている《如来三尊仏龕 姚元景造》（作品番号TC-718）であることが分かった⁽¹⁵⁾。早崎が中国で撮影した美術品の写真は『東京美術学校校友会月報』にたびたび掲載されていた⁽¹⁶⁾。そのうちの一点で、『月報』六巻三号（明治四十年十一月三十日）に掲載されている図版が、東博所蔵作品と同一作品だったのである。『月報』の解説によると、本作品が同石仏群中でも有名なもので、当時は早崎の所蔵で、東京帝室博物館で陳列されていた。

この展示の期間など詳しいことは不明であるが、同石仏群はしばしば東京帝室博物館で公開されていたのである。

そして後述するように、石仏群のうち二点が明治四十一年に三溪により購入された。以下、その購入経緯について述べていく。

二、原三溪旧蔵宝慶寺石仏

先に述べたように、早崎の請来した宝慶寺石仏のうち、三溪も二点所蔵していた。この二点は昭和二十五年の宝慶寺に関する福山氏の論考（既出）に原家蔵として二点とも記録されていることから、この時点では原家に所蔵されていたことが分かる。つまり三溪は生前、二点の作品を手放すことなく手元に置いていたのである。

三溪旧蔵の二点の石仏は、大村西崖の『東洋美術大観』（審美書院、大正四年）、『支那美術史彫塑篇』（仏書刊行会図像部、同四年）でも「原富太郎君蔵」として写真が掲載されており（図3・図6）、仏教美術研究者の間でも三溪旧蔵の二点については周知のことであった。その後昭和八年に重要美術品、同十一年に国宝に認定されたのは先に述べたとおりである。

三溪旧蔵品の石仏二点の現在の消息は不明であったが、調査したところ、一点は根津美術館所蔵《十一面観音立像龕》（図1）であり、もう一点は奈良国立博物館寄託《如来三尊像》（図2）であることが分かった。両作品とも三溪旧蔵

を示す資料はないが、以下の理由から特定した。

まず、これまで宝慶寺石仏に関する研究で三溪旧蔵とされてきた作品の図版(図3・図6)と現存作品とを比較してみると、《十一面観音立像龕》の(向かって左腕の破損状況、面貌や細部の表現などから、やや不鮮明な図版であるものの、同一作品と見てほぼ間違いないと思われる。

さらに、《十一面観音立像龕》は昭和二十五年五月、他の戦前の国宝と共に一括して重要文化財に指定されていたことから、戦前は国宝であったと考えられ、三溪旧蔵品と一致する。

ただ、根津美術館の記録によると、三溪とは別の人物から昭和五十六年に購入されていた⁽¹⁷⁾。したがって本作品は原家から出たあと、別の所蔵者を経て同館所蔵になったことになる。

一方、《如来三尊像》は、三溪旧蔵の図版と奈良国立博物館寄託作品と同じ銘文の記載があることから、同一作品であることが確認できた⁽¹⁸⁾。

なお、三溪自筆の美術品購入記録である「美術品買入覚」を調べたところ、「明治四十一年、一金五千円也 唐朝宝慶寺石仏二体 早崎氏より購入」という記載があり、三溪が「石仏二体」を早崎から購入していたことが分かった⁽¹⁹⁾。五千円は同記録のこの年の最高金額であり、渡辺華山の《名花十友図》の四千三百円がそれに次いで高額であった。

三溪がこの二点の石仏を早崎からなぜ購入することになったのかはよく分かっていないが、白川一郎氏によると、早崎は三溪と岡倉天心を通して知り合い、明治三十五年から同三十九年の間、中国古美術の研究と蒐集に精力を傾けた際、三溪はパトロンとして早崎の活動を支えたという⁽²⁰⁾。もし援助が事実なら、その中でも優品であった石仏二点を購入しても不思議ではない。

そして、この時期の早崎の中国請来品の処分に関与していたのが、東京美術学校校長の正木直彦だった。護立の同石仏群購入に正木が関与していたことが手掛かりとなって調べてみると、やはり三溪の購入にも正木が関わっていたのである。

正木の日記『十三松堂日記』第一巻(中央公論美術出版、昭和四十年)によると、明治四十一年一月十二日、早崎は正木を訪れ、「支那請来物」について相談している⁽²¹⁾。この時の日記で宝慶寺仏像については触れられていないものの、同年の四月十九日に三溪の所蔵品を見に正木が三溪園を訪問した際には、



図5 大村西崖『東洋美術大観』第146図「開元十二年揚思尉造坐像三尊石仏、高三尺六寸五分、横浜 原富太郎君蔵」



図4 大村西崖『支那美術史彫塑篇附図』第801図「十一面観音 高三尺六寸、原富太郎君蔵」



図3 大村西崖『東洋美術大観』第143図「十一面観音石像 高三尺六寸、横浜 原富太郎君蔵」

宝慶寺石仏二点を見たことも記述されていたので、以下に紹介したい。

正木は同年の三月二十九日、三溪の本牧の邸宅で所蔵品を見せてもらうよう所望した。折悪しくその日は雨で中止となったため、同年四月十九日再訪し、三溪のコレクションを見学している。その時の様子も日記に詳しく記録されており、そこには宝慶寺石仏二点についても記載されていた。正木の同伴者は、牧野（信題）文部大臣、塚本靖、藤岡作太郎、片野四郎、岸光景、中川中順、荻野仲三郎、平子鐸嶺、高嶺秀夫などであった。正木一行は横浜でサムライ商会の野村洋三に馬車で迎えられ、三溪園の梅園では三溪の出迎えを受けている。

そして宝慶寺石仏二点は、三溪園内に移築された東慶寺仏殿内の「定朝作葉師坐像」の左右に、まるで脇侍のごとく置かれていたという⁽²⁾。本記録は当時の鑑賞の様子が如実に分かるという点でも貴重である。

正木の日記の記載によると、三溪が早崎から石仏を購入したのは、明治四十一年の一月から三月の間である。一月に早崎が請来品について相談に訪れていることから、その間に正木が仲介して三溪が石仏二点を購入したとすれば、四月の訪問（当初の予定では三月）はそのお披露目の会を兼ねていたとも考えられる。

三溪はこれらの石仏について先の「美術品買入覚」の他には何も書き残していない。先に述べたように、二点の石仏を生涯手放すことはなかったわけであるが、自らのコレクションを代表するものとも思っていなかったようだ。というのも、三溪が生前、所蔵品図録のために執筆した作品解説であり、自身の代表的な所蔵品について紹介した三溪の古美術手記⁽²⁴⁾にも掲載していない（本目録は日本及び東洋の絵画作品のみ取り上げたものであり、彫刻の類いは含まれていないのである）。

さらに、三溪に関する基礎的な文献として広く読まれている矢代幸雄『芸術のパトロン』⁽²⁵⁾の記述も影響を与えていたことも考えられる。

矢代は同書で、三溪が正木を始め文化財関係者を好ましく思っておらず、当たり前の交際はしていたが、（大正四、五年頃、引用者註）三溪園に頻繁に訪ねてくるような親しい関係ではなかった⁽²⁶⁾と記している。確かに正木の日記にも三溪と親しく関わったと受け取れる記載は他になく、両者が親しく交際する関係であったとは考えられない。むしろ明治四十一年の訪問に特別な事情があった



図6 大村西崖『支那美術史彫塑篇附図』第七九一図「開元十二年揚思勗造三尊石仏」原富太郎君蔵

のではないかとも思われる。文部大臣他、著名な日本画家、美術史家たちの参加もそれをうかがわせる。三溪もこの一回きりの訪問を、数年も経ってから改めて矢代に語る必要を感じなかったから伝えなかったまでのことであろう。しかし、正木一行の訪問が事実とすれば、矢代の記載は不正確と言わざるを得ない。同文献は三溪研究の基本書のひとつであり、三溪の人間像を知る上でも非常に重要であることは言うまでも無いが、あくまで矢代の記憶に依る伝聞であり、慎重な扱いが求められることを言い添えておきたい。

こうした事情もあって、これまでの三溪に関する文献でも触れられてこなかったと思われる。

三溪は日本の仏具や仏像を積極的に蒐集し、茶会に取り入れていたが⁽²⁷⁾、宝慶寺石仏のような石像は茶道具のための蒐集の範疇にも入らないため、三溪旧蔵品の中では異色の存在と言える。次章で述べる護立の蒐集とは違い、三溪は主に骨董商から古美術を購入しており、専門家のアドバイスを得ながらの購入ではなかった。その意味でも同石仏の購入は三溪にとって例外的だった。

なぜ三溪が同石仏を購入したのかについてはっきりしたことは分らない。三溪が早崎の中国調査を援助したとすれば、その見返りとも考えられるが、あくまで推測の域を出ない。

また、同石仏は研究者たちの間では早くから重視されていた作品ではあったものの⁽²⁸⁾、三溪の好んだ古典的な名品や茶道具などとは相容れない対象だった

ため、その後こうした中国の古美術品が三溪のコレクションに加えられることはなかったと考えられる。

この石仏が三溪の所蔵品として最も脚光を浴びたのは、先の明治四十一年の鑑賞会だったのかもしれない。それは以下に述べる護立の場合と対照的なものといえる。

三、細川護立旧蔵宝慶寺石仏群

護立が宝慶寺の十九点の石仏群を入手した経緯は、先述したとおり正木直彦の『十三松堂日記』第二卷（昭和四十年）に記されていることが、小泉惠英氏により明らかにされている⁽²⁹⁾。ここでは正木は明らかに仲介者としての役割を果たしている。なお、同氏の研究を踏まえて同日記を検討したところ、同石仏についての記載が他にも断続的に記載されていたため、ここで紹介する。

同日記によると、昭和三年二月二十一日に洋画家の中丸精十郎が「早崎稷吉の金石の所蔵目録」を持参し、さらに翌朝正木を再訪して、早崎の所蔵品を護立に見せてほしいことを伝えた。その続報は書かれていないが、最終的には「長安宝慶寺の石仏十六点、北魏隋唐の石仏」あわせて二十点を二十万円で護立が購入することに決まった。そして、それらを引き渡す前に、早崎が正木、関野貞、荻野伸三郎を巢鴨の自邸に招いて鑑賞させたという⁽³⁰⁾。

小泉氏によると、永青文庫には同年三月二十八日付の領収書が残されており、立会人として関野貞の名前の入った二十一点の仏像の売渡証が残っているという。正木の日記によるとこの時、同石仏十九点のうち十六点しか購入していないが、護立は同六年にも、二十余点の仏像を早崎から入手していることから⁽³¹⁾、残り三点はこの時購入されたと思われる。正木の日記の記載（二十点より一点多いものの、購入の事実は確認できる）

ではそもそも、明治三十九年以来早崎によって所蔵されていた同石仏が、なぜこの時期護立の手に渡ることになったのだろうか。

この問いに答える資料は見つかっていないため三溪の同石仏入手の事情と同様推測にとどまるが、護立の身邊に手がかりを探してみたい。

護立は大正十四年（一九二五）、黒板勝美、村川堅固の依頼により、朝鮮樂浪の漢代の遺跡の発掘を援助している⁽³²⁾。

また昭和二年、護立は一年半の欧州旅行から帰国し、同年十一月、今も永青

文庫に所蔵されている唐三彩作品を含む中国古美術の名品を購入することになり、関野貞、奥田誠一⁽³³⁾に相談した上で入手している⁽³⁴⁾。この時入手した唐三彩作品は昭和三年、華族会館で展覧され、図録も刊行された。

したがって、大正末から昭和初期にかけ、護立が研究者たちとつながりを深めつつ、東洋美術コレクターとして知られるようになったため、宝慶寺石仏の購入者として白羽の矢が立ったのではないだろうか。

四、宝慶寺石仏群をめぐる人々―正木直彦、関野貞、荻野伸三郎

改めて正木の日記を調べてみると、昭和三年三月の購入以降も、護立旧蔵の同石仏について印象深い記載がなされていた。

石仏が購入された昭和三年六月、正木は関野、荻野、早崎、奥田誠一、村川、原田淑人⁽³⁵⁾と共に細川邸に招かれている。この時、正木は護立から、石仏の設置場所を改築したので見るよう勧められ、実際に柵が以前より広くなり、また夜中に蠟燭の光で見ると一層良いと書いている⁽³⁶⁾。この記述から、正木がこれ以前にも細川邸で石仏を目にしていたことが分かる。

さらに正木は昭和十二年十二月五日、細川邸を訪れ、石仏と再会している。それは大蔵会⁽³⁷⁾の会場となった細川邸を、金工家の清水亀蔵を伴い訪問した際のことである。この時「弥勒や宝慶寺龕像」を久し振りに見て「誠に近時将来（マ）品の白眉なり」と感想を記している⁽³⁸⁾。

これらの感想から、正木が同石仏群に強い感銘を受けていたことがうかがわれる。石仏の魅力は護立に石仏を紹介した正木も認めるものであった。

次に、正木と共に同石仏を見た人物のなかでも、関野貞と荻野伸三郎に注目したい。関野貞（一八六七―一九三五）は早くから文化財保護に関わり、古社寺保存委員会、国宝保存会、重要美術品調査の委員を務めた。東洋および日本の建築史を中心に、彫刻、絵画、工芸まで幅広い関心を持ち、中国、朝鮮、インドなどの発掘調査を精力的に行った。多くの論考を執筆し、東京帝国大学教授も務めた人物である⁽³⁹⁾。

『関野貞日記』（関野貞研究会編、二〇〇九年）の記載からは、聖徳太子奉賛会、国宝保存会等の公務のほか、細川家の結婚式にも出席するなど、同日記には昭和十年に関野が没する直前まで、関野が護立と公私に渡り親しく交際していることが記されていることから、ここで紹介したい。

同日記での護立に関する記載の最初は昭和二年十二月十三日、護立のために中国の古美術を見たというものである⁽⁴⁰⁾。翌年九月二十一日には、護立が関野の勤務先（東京帝国大学）を訪れ、「六朝石仏写真」と「白石（村治）君銅仏」を一覧させ、同二十三日に「白石君銅仏、細川侯購入決定（二万五千円）」と記載されている（ママ）⁽⁴¹⁾。

さらに翌昭和四年一月二十四日にも「細川侯ノ為、北齊仏ヲ見る」とあり、場所は書かれていないが、護立のために作品を見たことが記されている⁽⁴²⁾。同年十月十五日には護立邸にて、黒板、荻野、奥田、原田と中国出土品を見る、とある。ただしこの時は鑑定したのか単純に鑑賞したのか判断できない⁽⁴³⁾。関野の日記には所蔵家や古美術商の作品を見に訪れたという記載が散見されるが、そのひとつだったのかもしれない。

以上、関野の日記の記載から、関野が護立のためにたびたび購入作品の鑑定の便宜を図っていたことを具体的に見てきた。同日記は護立コレクションの購入経緯を示す意味でも有力な資料であることを指摘しておきたい。

最後に、正木や関野と共に三溪園、早崎邸、細川邸を訪れていた人物の一人として、荻野伸三郎（一八七〇—一九四七）を取り上げる。荻野は明治三十年に東京帝国大学を卒業し、国宝保存会委員、重要美術品等調査委員会委員、史跡名勝記念物調査委員会委員等を歴任した。日本古代史、東洋史関連の著作もあり、文化財行政に深く携わった人物であり⁽⁴⁴⁾、歴史学者としても知られていた。内務省の嘱託職員として神社局に設置当初から所属し、神社昇格に関する考証などに当たり、関連文献を集める業務に従事し、その後文部省で文化財行政に関わっていったという⁽⁴⁵⁾。聖徳太子奉賛会委員も務めており、ここで正木、護立ともたびたび同席していたことが正木、関野の日記にも記載されている。特に正木の日記には荻野が正木と文化財保護の件で相談し合っている様子がしばしば見られ、時には正木に所蔵品を重要美術品に登録するよう勧めるなど、指定にも影響力を持っていた様子がうかがわれる⁽⁴⁶⁾。

先述したように、荻野は明治四十一年、三溪が宝慶寺石仏を入手し、正木を自邸に招いた時にも同席している。詳細は今後の課題としたいが、宝慶寺石仏の移動をめぐって、正木、荻野、関野といった文化財保護関係者たちが深く関わっていたことを指摘しておきたい。

五、『世界美術全集』における宝慶寺仏像の紹介について

最後に、同石仏群が一般に紹介される契機として、日本初の美術全集とされる『世界美術全集』⁽⁴⁷⁾の記載を紹介したい。

本全集の最も特徴的な点は、日本を含めた世界の美術を時代ごとに紹介したことである。これは編集委員の一人田辺孝次の発案で、平凡社社長の下中彌三郎も賛同して決まったという⁽⁴⁸⁾。

同石仏群は、『世界美術全集』の第七巻「ビザンチン インドグプタ朝 唐時代 新羅統一時代 白鳳時代」（昭和二年刊）、八巻「ビザンチン 唐時代 天平時代（二）」（同三年刊行）の二巻に掲載されていた。

昭和二年に刊行された第七巻掲載の《宝慶寺三尊仏刻石》には所蔵者の記載がないが、翌年刊行の第八巻《西安宝慶寺陽刻釈迦三尊石像》《西安宝慶寺石像面菩薩立像》（二点の十一面観音像を掲載）には護立所蔵の記載がある。つまり、護立が昭和三年に宝慶寺石仏を入手したのとはほぼ同時に、本全集に紹介されていることになる。関野は編集委員の一人でもあり、護立の宝慶寺入手の現場に立ち会っていた経緯からも、関野が本作品掲載にも関与したことがうかがわれる⁽⁴⁹⁾。

明治末期に日本にもたらされた宝慶寺石仏群は、昭和初期には世界美術全集にも紹介され、一般にも広まっていた。その紹介の背景として、同石仏を紹介した関野と護立とのつながりもうかがわれる。

おわりに

以上、宝慶寺石仏の所蔵経緯を中心に論じてきた。そして、国内に所蔵されている石仏は全て三溪、護立によって購入されていたことを確認した。特に三溪に関してはこれまでほとんど所蔵が知られてこなかった同石仏の入手当時の状況について、当時どう展示されていたかなど、具体的に明らかにした。

護立による同石仏群の所蔵経緯については既に周知のことであるが、正木直彦、関野貞、荻野伸三郎という、文化財保護に深く関わっていた人々について再検討し、その実態を具体的に示した。

特に護立旧蔵品は『世界美術全集』に掲載され、一方、日本における仏教美術研究者により戦前、戦後を通じて研究されている。こうした事実から、三溪、護立は同石仏群の日本における受容において、重要な役割を果たしたと考

えられるのである。

専門家を介した購入をほとんどしなかった三溪であるが、同石仏に関しては、なぜか護立と同様、正木が関与しており、見学の際には萩野も同席していた。同石仏をなぜ三溪、護立が入手することになったのかについては、石仏を請来した早崎と、その相談役であった正木との関係も含めてぜひ知りたいところであるが、現段階ではこれ以上の解明は難しく、中間報告的な内容にとどまった。いずれ別稿で改めて論じたい。

本稿で論じてきた護立をめぐる人脈については、護立が文化財行政にどのように関わるようになって行き、どう活動したのかについて明らかにすることによって、いっそう明確になると思われる。護立旧蔵品の全容の解明とあわせて検討を進めていきたい。

付記

本稿への図版の掲載をお許しくださった関係各位、また本稿作成に当たり調査に御協力いただいた永青文庫学芸課長三宅秀和氏、根津美術館学芸課長白原由起子氏、東京国立博物館列品管理課登録室永富雅信氏、その他の関係諸機関、査読の労を執ってくださいった先生方に深く感謝申し上げます。

本稿は公益財団法人 出光文化福祉財団平成二十三年年度研究助成、JSPS 科研費（基盤研究（C）課題番号 24230221）による研究成果の一部です。感謝してここに記します。

註

- (1) ①拙稿「日本近代美術の蒐集家―原三溪の美術蒐集記録『美術品買入覚』に見る近代美術コレクションについて」『学習院大学人文科学論集』第十二号、二〇〇三年、②同「原三溪の美術蒐集記録『美術品買入覚』に見る古美術蒐集品の変遷とその背景」『哲学会誌』第二十八号、二〇〇四年、③同「原三溪の美術家援助」『学習院大学人文科学論集』第十三号、二〇〇四年。
- (2) 拙稿「細川護立と原三溪の美術蒐集―近代工芸との関わりを中心に―」（『豊穣の日本美術』藝華書院、二〇一二年。護立の近代美術、特に日本画と洋画については塩谷純氏の論考がある（塩谷純「細川護立と日本の近代美術」『細川家の至宝』展図録、東京国立博物館他、二〇一〇―二〇一二年）。

(3) 註(1)前掲拙稿②参照。

(4) 浅湫毅「宝慶寺から請来された石仏群―細川護立と中国彫刻―」註(2)前掲『細川家の至宝』展図録所収。

(5) 宝慶寺石仏群に関しては以下の論考を参照した。福山敏男「宝慶寺派石仏の分類」『仏教芸術』九、一九五〇年十月、杉山次郎「宝慶寺石仏研究序説」『東京国立博物館紀要』第一三三号、一九七八年、本山路美「宝慶寺石仏群の造営事情について」『美術史研究』十八、一九八一年。宝慶寺石仏群の所蔵者に関しては福山論文が最も詳しく、また石仏請来以来の先行研究も詳しく紹介されている。石仏群の像造の経緯に関しては、本山論文で詳細に検討されている。

(6) 本山註(5)前掲論文参照。

(7) 釈迦三尊よりも仏教の尊格の低い十一面観音のほうが良い石材が用いられ、丁寧な彫りが施されていることに疑問が呈されており、当時の設置状況をさらに考慮すべきことが指摘されている（浅湫註(3)前掲論文参照）。

(8) 宝慶寺石仏作品解説より（奈良国立博物館『平安遷都一三〇〇年記念 大遣唐使展図録』二〇一〇年、三〇七ページ）。

(9) 鈴木喜博「永青文庫昭和五十九年度第一期展示『中国仏教彫刻』」『季刊永青文庫』第十一号、一九八四年。

(10) 『官報』第一九九四号、一九三三年、六八七ページ。

昭和八年、経済悪化により国宝に指定されていない古美術品の海外流出が激増したため、それらの作品の海外流出を防止する法的措置が昭和六年検討され、「重要美術品等ノ保存ニ関スル法律（同年法律第四十三号）」が公布、施行された（文化庁『文化財保護法五十年史』二〇〇一年、十ページ）。

(11) 『官報』第二九一六号、一九三六年、四四五ページ。なお、国宝認定時の原家の所蔵者は三溪の長男、原善一郎である。

(12) 旧国法は昭和二十五年五月三十日廃止され、国宝だった物件は全て重要文化財に指定されている。

(13) 早崎については以下の文献を参照した。「第一回『岡倉天心先生を語る』座談会」、『五浦論叢』第七号、二〇〇〇年、東京国立博物館『清朝末期の光景―小川一眞・早崎梗吉・関野貞が撮影した中国写真―』展図録、二〇一〇年。

(14) 「明治三十九年八月七日 クーリッジあて『岡倉天心全集』第六卷「書簡Ⅰ」平凡社、一九八〇年。早崎帰国の記事は、「卒業生動静 早崎梗吉氏」にも書

- かれている（『東京美術学校校友会月報』第五巻第一号、明治三十九年十月二十四日）。早崎と関野との関係については、大西純子「六 中国旅行の日記について」『関野貞日記』中央公論美術出版、二〇〇九年）に詳しい。
- (15) 「嘗て邦人某（早崎のこと、引用者註）これが請来の壮挙を企て、今やその数舗は移され来て既に東台博物館（現東京国立博物館）の一隅を飾る。」（平子鐸嶺「長安宝慶寺の唐代石仏について」『美術新報』第七巻第四号、一九〇八年五月、二一三ページ）。
- (16) 大西註(14)前掲論文参照。
- (17) 旧国宝指定の可能性、旧蔵者については、根津美術館学芸課長白原由起氏に御教示いただいた。
- (18) 三溪旧蔵作品、現存の奈良国立博物館寄託作品は何れも開元十二年、揚思勗により刻まれた銘文がある。ただ、大村西崖は「揚思勗造」とキャプションに入れているが、現在は制作当時ではなく後から入れられたものとされている（前掲註(8)参照）。
- (19) 「美術品買入覚」（三溪園保勝会蔵）五冊中の三冊目、明治三十六年から四十一年までの記録、後ろから五枚目。
- (20) 白川一郎「竜門石窟を発見した日本人—岡倉天心の中国探題として中国美術を世界に齎した早崎天真—」『芸術新潮』一九五九年七月号、二八九ページ。白川氏は論拠を示されていないため確認できなかったが、同論考は白川氏が早崎に面会して直接聞いたことをまとめた記事であることから、本人から聞いたのかもしれない。三溪が早崎を援助したことは白川氏の論考以外では見られないため、より詳しい検討は今後の課題としたい。
- (21) 『十三松堂日記』第一巻、九ページ。
- (22) その他、松井真吉、丹波敬三、中山寛六郎、和田萬吉の名も記されている。
- (23) 註(20)前掲書四四ページ。なお、田中日佐夫はこの時の正木の三溪園訪問について触れ、（前略）「東慶寺仏殿内にあったという薬師像も今はない」と述べている（田中日佐夫『美術品移動史 近代日本のコレクターたち』（日本経済新聞社、一九八一年、八〇ページ）。したがって同日記の旧東慶寺仏殿内の宝慶寺石仏の記述にも目を通していたはずであるが、それについてはまったく言及されていない。
- (24) 矢代幸雄『藝術のパトロン』新潮社、一九五八年。
- (25) 註(24)矢代前掲書。
- (26) 註(24)矢代前掲書、一二五ページ。
- (27) 註(1)前掲拙稿「原三溪の美術蒐集記録『美術品買入覚』に見る古美術蒐集品の変遷とその背景」参照。
- (28) 宝慶寺の十一面観音像龕の中に、薬師寺東院堂聖観音像に酷似するものがあり、さらに同観音像龕の正面観と、『法隆寺金堂壁画』のそれとは類似していることから、東アジアにおける仏教図像の伝播を考える上で重要であることが指摘されている（稲本泰生『薬師寺東院堂聖観音像菩薩立像』作品解説（註(8)前掲図録参照）。
- (29) なお、宝慶寺石仏群は明治二十七年、岡倉天心の講演会で言及されたのが最初であり、この時から薬師寺の聖観音像との類似は注目されていたという（註(5)福山前掲論文参照）。
- (30) 小泉氏による『如来坐像』（永青文庫蔵）作品解説による（註(2)前掲『細川家の至宝』展図録、四一六頁）。
- (31) 『十三松堂日記』第二巻、五六〇、五七二ページ。
- (32) 浅湫毅註(2)前掲論文による。諸事情により調査はかなわなかったが、永青文庫学芸課長三宅秀和氏に照会したところ、領収書の記載内容を御確認いただいた。
- (33) 黒板勝美（一八七四—一九四六）：日本史学者、東京帝国大学教授。国宝保存会委員、日本古文化研究所所長などを務め、文化財保護にも尽力した（吉川弘文館『国史大辞典』）。
- (34) 村川堅固（一八七五—一九四六）：西洋史学者で東京帝国大学教授（講談社『日本人名大辞典』）。
- (35) 奥田誠一（一八八三—一九五五）：東洋陶磁研究者で特許局勤務のかたわら、陶磁器研究会の先駆けである陶磁器研究会、彩壺会、東洋陶磁研究所を設立し、陶磁器研究を牽引した（前掲『国史大辞典』）。奥田誠一の活動に関して木田拓也「大河内正敏と奥田誠一 陶磁器研究会／彩壺会／東洋陶磁研究所」（『東洋陶磁』第四十二号、二〇二二—二〇二三年）参照。
- (36) 細川護立「美の蒐集『欧州周遊記』」細川護熙編『美に生きた細川護立の眼』求龍堂、二〇一〇年、一五〇—一五一ページ。なお、護立旧蔵品は現在調査中であり、その詳細は別稿に譲りたい。

- (35) 原田淑人（一八八五—一九七四）：東洋考古学者で東京帝国大学教授。文化財保護にも深く関わり、東京帝国博物館監査官、東京国立博物館評議員、国宝審議委員などを歴任した（吉川弘文館『国史大辞典』）。
- (36) 『十三松堂日記』第二巻、六〇二ページ。
- (37) 大蔵会とは、大正三年十一月三日（明治天皇の誕生日）に、東京美術学校で開催されたのを端緒とする仏教式典である。以降、京都、名古屋でも開催されたという。大蔵会の発足の経緯や詳細については、牧田諦亮「大蔵会の回顧と展望」（『佛教大学仏教学会紀要』第四号、一九九六年）参照。東京の会場は、東京美術学校、築地本願寺、東京帝室博物館、大正大学、日本民藝館などで開催され、会場も時宜により転々としたとされ、そのうちのひとつに護立郎が入っている。ただ、会則によると十一月三日となっているが、『十三松堂日記』では十二月となっていることから、日程も変更することもあったのだろうか。同会の委員には常盤大定をはじめとする仏教関係者のほか、荻野仲三郎、中川中順も入っていた。
- (38) 『十三松堂日記』第四巻、一九六六年、一四九〇ページ。
- (39) 関野貞については以下の文献を参照した。関野克『建築の歴史学者 関野貞』上越市総合博物館、一九七八年、藤井恵介、早乙女雅博、角田真弓、西秋吉宏編『関野貞アジア踏査』東京大学総合研究博物館、二〇〇五年、平勢隆郎、塩沢裕仁編『関野貞大陸調査と現在』東京大学東洋文化研究所、二〇一二年。
- (40) 『関野貞日記』六一一ページ。
- (41) 『関野貞日記』六一七ページ。なお、白石村治（一八六四—一九二九）は正木とも懇意であった古美術商である。同志社、明治学院に学び、各地で伝導に従事したが、明治四十二年に打ち切り、古美術品の鑑定や売買に当たった。正木とは奈良滞在中に知遇を得たとされ、東京美術学校に十数回も古画購入の仲介をした。同校による研究図録『法隆寺大鏡』刊行にも中川中順と共に尽力した（東京芸術大学百年史刊行委員会編『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇』第二巻、一九九二年、五五九—五六一ページ）。
- (42) 『関野貞日記』六一四ページ。
- (43) 『関野貞日記』六三〇ページ。関野が護立所蔵の中国彫刻作品を調査したという指摘もある（肥田路美「関野貞の中国彫刻史研究と石窟調査」註（35）『関野貞アジア踏査』三二九ページ）。
- (44) 東京文化財研究所HP「『日本美術年鑑』（当研究所刊行）所載物語記事」の「荻野仲三郎」より（<http://www.robunken.go.jp/japanese/bukko/menu.html>）。同記事によれば陽明文庫の文庫長も務めたという。
- (45) 高知県神職協会『荻野先生講演録』一九二二年。
- (46) 『十三松堂日記』第三巻、一九六六年、一三二四ページ。
- (47) 太田智己「美術全集の歴史 その始まりから現在まで」第一回「日本初的美術全集—平凡社『世界美術全集』（一）月報」、小学館『日本美術全集』二「飛鳥・奈良時代Ⅰ」小学館、二〇一二年。
- (48) 尾崎穂樹『平凡社六十年史』一九七四年、平凡社、九五ページ。同書は平凡社の「現代大衆文学全集」の後続企画であり、一冊一円の円本による美術全集として構想された。下中は「現代大衆文学全集」の好調により、美術全集刊行を決意したという。
- (49) 宝慶寺石仏の解説は関野が担当しているが、護立所蔵の第八巻《四天王俑》《唐三彩獅子》《唐三彩壺》解説は田辺孝次が執筆しており、専門家ごとに担当が分けられている。

【図版出展】

- 図1（全図、部分図とも）根津美術館『鑑賞シリーズ11 館蔵中国の石仏—北齊仏の魅力—』二〇〇九年
- 図2 『大遣唐使展』図録、奈良国立博物館、二〇一〇年
- 図3、5 大村西崖『東洋美術大観』審美書院、一九一五年
- 図4、6 大村西崖『支那美術史彫塑篇附図』復刻、国書刊行会、一九七二年